

現代日本語のデモについて

——デとモの機能からの分析——

久保 篤子

1. はじめに—本稿の目的—

本稿では、「子どもでも大人でも、人間としての責任は同じ」や、「助けを呼んだことがばれたらひどい目に遭うかもしれないし、どんなに鈍い犯人でも場所を移そうとするだろうしね。」のようなデモを助詞モ⁽¹⁾との関係で考察する。

デモはももとの語構成からみればデ+モであると容易に想像がつくが、デとモがそれぞれどのような働きをしてデモの意味をなすのかはあまり研究されていない。

本稿は、デモの用法をまとめなおし、デとモがそれぞれどのような働きをして、デモの意味をなすのかを考えることを目的とする。

ところで、先行研究ではしばしばデモが1語であるか、デ+モの2語であるかが大きな論点とされてきたが、本稿ではこの問題について判断を保留する。本稿は、デモを基本的にデ+モと考えてデとモのそれぞれの働きを考えるのであるが、それはあくまでも、機能の面で分割して考えるということであって、形態論的にデモがデ+モの2語であると強く主張するものではない。

2. デモの先行研究

デモについては多くの先行研究がある。しかし、デモの意味用法についての先行研究は多いものの、デモを機能の面で分割して考え、デとモのそれぞれの働きについて言及した研究はあまり多くない。

まず、意味用法からデモを分類すると、主要な先行研究では次ページの表1のようになる。

なお、表中の「×」は論文中に言及がないことを、「？」は直接の言及はないが、おそらくここに相当するだろうことを表す。例文はすべて小野米一・李志華（1988）による。

表 1：先行研究におけるデモの用法一覧

例文	小野米一・李志華 (1988)	定延利之 (1995)	澤田美恵子 (2007)	沼田善子 (2007)
(1) そんなことは子供 <u>でも</u> 知っている。	ある特別と思われる場合を例示し、その他の場合は言うまでもないの意を表す	譲歩・逆接	譲歩・逆接	意外
(2) <u>誰でも</u> 彼が好きになるよ。	疑問詞を受け、全部を包括した形で事柄が成立することを示す	×	×	×
(3) 雨天でもあすの旅行は行きます。	前にあることがらとあとのことがらの関係がふつうなら考えられないような関係にある場合「それでもなおかつ」「たとえ～だとしても」の意を表す	譲歩・逆接	譲歩・逆接	意外
(4) 僕は <u>昼でも夜でも</u> 構わない。	関連する物事の中からいくつかを例として示す	×	×	×
(5) まだ時間があるので <u>お茶でも</u> のんで行きましょう。	他により適当なものがあるかも知れぬが、という気持ちを言外に含めて、ある事柄を例示的に提出する	確定回避	確定回避	例示
(6) ご飯でも <u>お粥でも</u> 早い方を頼む。	一对の語を挙げ、その中のどれかあるいは列挙された物事とおなじ種類の中のどれかを選択する	? 確定回避	? 確定回避	? 例示

次に、デとモに分割してデモを考えた先行研究を概観してみる。

定延利之 (1995) はデモを「デ+モ」と考え、自身のモの枠組⁽²⁾と照らし合わせて意味分類を行っており、「演奏会は東京でも行うが、そのあと大阪でも行う。」のような「格助詞+モ」のものほかに、「彼は大学の教授だよ。テレビタレントでもあるけどね。」のような「事態表現の末部 (ダ) がモの後接によりデになったものに基本的なモがついたもの」(これはモの種類によって色々ありうる)、「中学生でも合格だ。」のような「判定詞+意外のモのもの」を考えている。

また沼田善子 (2007)⁽³⁾も定延同様、「この夏は東京でも35度を超える日が続いた。」のような「格助詞 [場所] 「で」 + 基本のモ」のほかに、「太郎は親友の息子であると同時に、自分の学生でもある。」のような「判定詞「だ」 + 基本のモ」、「そんなことは子供でも知っている。」のような「コピュラ「だ」の中止形「で」 + 意外のモ」等を考えている。

しかし、両者ともデモのデについては、コピュラ、判定詞などとしているが、デの働き

を詳しくは述べておらず、デとモがどのように働いてデモの意味用法をなしているかは未だ考える余地が多く残されている。

先行研究でのデの働きをまとめると以下ようになる。

延延：意外のデモのデは判定詞。デは観察対象の指定を表し支援・強化するだけでなく、判定詞本来の機能を發揮して事態表現をまとめる。

田川拓海（2005）：コンピュータ的なもの。（知的）意味は希薄で、しかし非常に統語論的に重要な役割を持つ。モについては言及しない。

沼田：単純付加の（基本）のデモは判定詞「だ」＋モ。

意外を表すデモではコンピュータのダ＋意外のモ。

3. 本稿で扱うデモの用法とデとモの働き

本稿ではデモ文で、モを除くと文が成立しなくなるもののみを研究対象とする。また、動詞の活用＋モのものはモを抜かすと文が成立しなくなるが、これはデモの問題であり、本稿では扱わない⁽⁴⁾。

モを除くと文が成立しなくなるようなデモ文には、4つの用法が考えられる。以下、それぞれの用法とデとモの働きを詳しく考察する。

3.1. 状況設定のデモ

用例は〔1〕～〔3〕のようなものである。

〔1〕つまり、裁定が「シロ」でも「クロ」でも、「どちらのケース」にも対応準備が現時点もっとも整っているのがトヨタだとも言えるだろう。（F1）

〔2〕子どもでも大人でも、人間としての責任は同じ。（週刊女性）

〔3〕だからこそ4位でも5位でも、とにかく1点でもポイントを獲得することに徹するべきだった。（F1）

上述の例文〔3〕の場合、下線部の「4位でも5位でも」の部分を

〔3〕'仮に4位であっても、5位であっても

と言いかえることができる。

これは「4位である」「5位である」という仮定の状況設定を行い、そのどちらの状況でも「とにかく1点でもポイントを獲得することに徹するべきだった。」という後件と共存することをモであらわす。このモは基本のモ⁽⁵⁾であり、後件と共存しうる要素の集合にモの上接要素を加える働きをしている。

この例文の、「4位でも5位でも」のデの働きは「仮定の状況設定を行う」ことであり、その働きは指定辞のダの持つ「物事を断定する」働きと連続性を有していると思われる。

一般に指定辞には物事を断定する作用がある。しかし、その「断定」が、現実世界の物事についてだけでなく、仮定世界においても作用するという指摘はこれまでの研究において特に明言はされていない。

しかし、「XがYだ」としたとき、この断定は現実世界のことにとどまらず、仮定世界でのことについての話でもいいのではないだろうか。

例えば、仮定の条件節を作る形式として「XがYすれば」の他に、「XがYだとする」という形式も存在する。この「～だとする」の形式は「ダ＋と＋する」と考えることができ、仮定節に指定辞のダが存在することは珍しいことではない。

この「「XがY」が成り立つとする（考える）」という仮定の文で、ダは「「XがY」が成り立つ」という部分を作っている。

つまり〔3〕におけるデの働きは指定辞のダ同様、「XがY」が成り立つ」と断言し、ある種の状況設定を行うことであり、それが現実世界の話（確定）か仮定世界の話かは実は自由なのである。

このように「ある種の状況設定」を行うのがデの働きであり、このデに基本のモを伴って要素を並べ、「並べられたどの状況でも後件と共存することを示す」のが状況設定のデの用法である。

この状況設定のデモはデモの用法の中でも典型的な用法であると言える。

3.2. 逆接⁽⁶⁾のデモ

逆接には状況設定のデモと同じく、仮定の状況を設定するものと、確定の状況を描くものがある。「XがYである」と状況を設定するのがデの役割なので、仮定であろうが確定であろうが大きな問題ではない。確定でも仮定でも、状況を設定した後、その設定された状況と共存が期待される後件とは違う後件が共存することをモを用いて述べるのが逆接のデモである。この逆接のデモには「無条件型」と「条件否定型」が存在する。

この逆接のデモは先行研究での「譲歩・逆接のデモ」「意外のデモ」とほぼ対応するものである。

3.2.1. 無条件型

無条件型はどんな前件であっても後件が成り立つことを示すものである。

[1] 基本

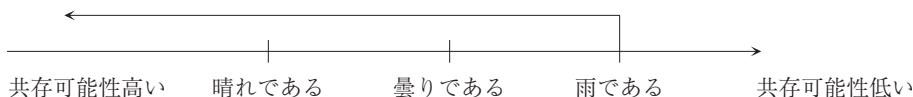
〔4〕 助けを呼んだことがばれたらひどい目に遭うかもしれないし、どんなに鈍い犯人でも場所を移そうとするだろうね。（夏季限定）

〔5〕 おバカキャラでブレークした好感度 NO.1 タレント、スザンヌの母が語る、おバカでも明るく元気な「新・教育論」（週刊女性）

〔6〕 雨でも運動会をします。

〔6〕 のような例が、典型である。「雨である」という状況を仮定的に設定したとき、「運動会をしない」のが共存を期待される後件であるが、助詞モによって「雨である状況の時も運動会をする」ことが述べられ、逆接の意味が出る。

このとき、「雨である」という状況は、「運動会をします」とは共存しにくい前件である。この共存しにくい前件が、後件「運動会をします」と共存することにより、後件とより共存しやすいと考えられる前件、「晴れである」「曇りである」のような状況は当然後件と共存する。このことから、「どんな前件でも後件と共存する」というような無条件性を出ることができる。これはモの上接要素のスケール性を利用している。



この用例では「雨である」という前件が「運動会をします。」という後件と共存しにくいと考えられるため、モは意外のモ⁽⁷⁾である。

〔7〕 助けを呼んだことがばれたらひどい目に遭うかもしれないし、どんなに鈍い犯人でも場所を移そうとするだろうしね。 (夏季限定) (=〔4])
この用例では、「鈍い犯人である」と仮定的に状況を設定し、「鈍いので何もしない」というような後件との共存が期待されるが、「場所を移そうとする」という後件と共存することで、意外、逆接の意味が出る。さらに、背後の集合は「賢い犯人」「普通の犯人」などの要素を含んでいる。

以下の例文〔8〕は無条件型のデモが2つ並んでいる例である。

〔8〕 雨でも雪でも運動会をします。

この例文では「雨である」「雪である」という状況が「運動会をします」と共存しにくい条件のため、逆接の意味が出る。さらに「晴れである」「曇りである」という状況と比べるスケール性を利用して、「どんな前件でも後件と共存する」という無条件性も出している。モの上接要素（前件）が後件と共存しにくいためモは意外のモであり、上述の逆接無条件型のデモとデとモの働きは同じだが、それを2つ以上重ねることも可能であることを表す例である。

逆接の無条件型のデモは状況設定のデモと連続性を有しており、デによって設定される前件から生まれる後件への期待の有無によって逆接の一種となるか、ただの状況設定となるかが決まる。

また、デによる状況設定は仮定でも確定でも構わないと述べたが、確定の場合の説明もしておく。

〔9〕 坂田でも95点だ。(定延1995)
が

〔9〕′ この前のテストは簡単だった。あの坂田でも95点だ。
のように確定の文脈で使われる場合、「坂田である。」という状況を確定的に述べた後、そこから期待される後件と違う後件が前件と結びついたことを述べる。

つまり、「坂田である。」という状況は「いい点をとらない。」「バカだ。」というような後件との共存を期待されるが、その期待とは違う、「95点だ」との共存をモで示すのである。

〔2〕 最終手段

無条件型の一種で、以下のような用例がある。

〔10〕 石に齧りついてでも諦めない。 (作例)

〔11〕 「今、谷口さんが、岡みどりの勤めてるバーへ行ってるの。もし来ていれば、何と

してでも真相を訊き出すって張り切ってたわ (女社長)

[12] 「(作業に戻りつつ) ……普通、手握ったら、押し倒してでも最後までいくだろ、バカ」 (せかいの)

例文 [12] では「押し倒して」を仮に設定するためにデがついている。この場合、前件となる「押し倒して」が後件「最後までいく」の方法として「望ましくないもの、最終手段である」というような含意がある。

この「望ましくないもの、最終手段である」というような含意から、背後の集合にモの上接の要素が加わりにくいと考えられ、モは意外のモである。

この用法もデで設定される状況が仮定的か、確定的かは大きな問題ではない。以下は確定の用例である。

[13] そこまでしてでも駄目だったの?! (作例)

[3] 最低限

この用法はデで設定される状況は仮定的なものに限られる。

[14] だからこそ4位でも5位でも、とにかく1点でもポイントを獲得ことに徹するべきだった。 (F1)

[15] 「新聞部の連中にも応援を頼んで、グループの概要だけでも調べようとしてるところだ」 (夏季限定)

[16] 会社理念「一人でも多くの人を助けたい」に共感し全国企業レポート「日本が元気です」に紹介されました。 (週刊女性)

例文 [16] のような文が典型的な例であり、仮定的状況設定をデが行っている。状況設定を行う時最低ラインを提示することによって、「当然それ以上が望ましい」のような意味を含意することができる。

この用法は「それ以上が望ましい」という含意があり、モの上接要素では後件との共存が期待されにくい(それ以上が期待される)。この面から最低限の用法の場合もモは意外のモであると考えられる。以下の [17] [18] も同様の例である。

[17] 10円でも欲しい。

[18] 猫の手でも借りたい。

3.2.2. 条件否定型

条件否定型は、後件と結びつく他の前件が背後に存在しない、前件と後件は1対1の関係であるということを示すものである。用例は以下のようなものがある。

[19] いくら小佐内さんでも、スプーンに唾液が付着しているか鑑定したりはしないだろう。 (夏季限定)

[20] 「それでこのシーナはね、むかし千葉の高校で番長をしていたんだ。同じ長でも同分ちがうけどなあ……」 (新橋)

[21] 1人でも生き残ったことは奇跡だ。 (作例)

[19] では「小佐内さんだ」と状況が設定されることにより、「スプーンの唾液鑑定ぐら

いするかもしれない」という後件との共存が期待されるが、「しないだろう」という後件と共存することで逆接の意味が出る。

この場合前件P（小佐内さんだ）の背後に集合があるとは考えづらく、前件と後件の関係は無条件型のように、「どんな前件でも後件が成り立つ」というものではなく、1対1の関係である。

そのためモ本来の「背後に集合を持つ」という文法的機能を失っているといえる。

また、

〔22〕 1人でも（1人ではあるけれども）生き残ったことは奇跡だ。（＝〔21〕）

〔23〕 たった10枚でも、CDが売れてうれしい。（作例）

のような文は一見最低限の用法にも見えるが、これは条件否定型である。

〔22〕〔23〕は

〔22〕´生き延びているのが1人でも奇跡だ。

〔23〕´売れたのがたった10枚でもうれしい。

のように言い換えることができ、「～でも」に対する後件が何なのか、注意する必要がある。

〔23〕では「売れたのがたった10枚」という状況が設定され、それに対して期待される後件は「少なくて悲しい」などの否定的なものであるが、その期待に反して「うれしい」という後件が共存するため逆接になる。

さらに、前件P（売れたのがたった10枚だ）の背後に集合を考えられないために条件否定型であるといえる。

ただし、〔22〕〔23〕のようなものは状況設定が確定に限られる。その点で、条件否定型の中でも少し特殊なものである。

3.3. 不定のデモ

不定のデモは空欄（不定詞）に当てはまり得るすべての要素において後件が成り立つことを示す。

〔24〕身代金目的誘拐がしばしば悲劇的末路を辿ることは誰でも知っている。（夏季限定）

〔25〕「どちらでも、私には関係がないことですね」（少し）

〔26〕どこへでも参りますが、何度来てもここは安心する街でございますね。（マダム）
デの働きは同じく状況設定であるが、モは汎称のモ⁽⁸⁾である。

〔27〕身代金目的誘拐がしばしば悲劇的末路を辿ることは誰でも知っている。（夏季限定）
（＝〔24〕）

は「誰」という不定詞（空欄）に当てはまりうる要素（＝人）のすべての要素において、後件「知っている」が成り立つことを示す。

この時〔24〕は

〔24〕´AさんでもBさんでもCさんでも……nさんでも知っている。

⇒誰でも知っている。

であり、デは「nさんである」という仮定の状況を設定する。「誰」は不定詞なので、不

特定の人物 n を示すのであって、複数の人数を示すのではない。

つまり

[24] ‘ A さんも B さんも C さんも…… n さんも知っている。

⇒誰も（が）知っている。

では、知っているひとをどんどん加えていくことができ、「すべての人が知っている」というような意味をあらわすのに対して、

[24] ‘ A さんでも B さんでも C さんでも…… n さんでも知っている。

⇒誰でも知っている。

では、人を加えるのではなく、どんどんと人を取り替えていくイメージで、言及しているのは常に一人である。

この「言及しているのは常に一人である」というのはデの状況設定の働きによる。モは「あてはまり得るものをすべて空欄にあてはめる」汎称のモである。

3.4. 例示のデモ

[25] 一体何だ、さては因縁でもつけられたかと肩越しに振り替えると…。(夏季限定)

[26] 知らない人が見れば、親戚のお兄さんに連れられて夜祭見学に来た小学生とでも思われること請け合い。(夏季限定)

[27] 「……こういうの、やっぱりやめときませんか?」「……お腹でも痛いの?」

(せかいの)

[28] しかし今週は「全国失礼週間」でもあるのだろうか。

(夏季限定)

例示のデモに関しては、沼田 (2007) では 1 語⁽⁹⁾として扱われており、定延 (1995) ではデ+確定回避のモと考えられている。

本稿でも例示のデモはデもモも本来の働きを失っており、デとモに分解できず、デモ全体でデモの上接要素を例示的に示す役割をしていると考える。

まず、

[28] しかし今週は「全国失礼週間」でもあるのだろうか。

(夏季限定)

は

[28] ‘ 失礼週間である。

にデモがつき

[28] 失礼週間でもある。

になったと考えられるもので、[28] ‘ の時点で、指定辞のダは存在しており、さらに状況設定のデを重ねると言うのは変である。

また、

[29] 「……こういうの、やっぱりやめときませんか?」「……お腹でも痛いの?」

(せかいの) (= [27])

も、「お腹が痛い」全体をデモで例として取り上げており、「お腹だ」という状況を設定することに何の意味もないし、設定しているとは言えない。

例示のデモが、もともとデ+モだったとしても、デもモももとの意味を失い、デモ全体

で例示という意味をあらわす形式として確立しているといえる。

4. デモの用法とデとモの働きのまとめ

以上、本稿で扱ったデモの用法は以下の通りである。

<1> 状況設定のデモ

<2> 逆接のデモ

<2.1> 無条件型

[1] 基本

- ・スケール性あり
- ・スケール性なし

[2] 最終手段

[3] 最低限

<2.2> 条件否定型

<3> 不定のデモ

<4> 例示のデモ

各用法ごとのデとモの働き、用法の特徴等を表にまとめると以下の表2のようなになる。

「後件に対する期待」とは前件と共存しやすいと考えられる後件の存在を意識することで、逆接の用法にのみ見られる。

また、「含意」とは「最終手段」の用法で、前件が「望ましくないもの、最終手段である」と考えられたり、「最低限」の用法で前件に対して「それ以上が望ましい」と考えられたりするものである。

表2：デモの用法とデとモの働き、各用法の特徴のまとめ

用法			デ	モ	後件の期待	特徴	含意
状況設定			状況設定のデ	基本のモ	×		×
逆接	無条件型	基本	状況設定のデ	意外のモ	○		×
		最終手段	状況設定のデ	意外のモ	○	最終手段を提示する	○
		最低限	状況設定のデ	意外のモ	○	最低ラインを提示する 仮定のみ	○
	条件否定型		状況設定のデ+モ モが本来の文法的機能を失っている		○	一部 確定のみ	×
	不定		状況設定のデ	汎称のモ	×		×
例示		デもモも本来の文法的機能を失っている		×	文全体を取立てる	×	

5. おわりに

以上のようにデモはデとモのそれぞれの働きを考えることによってその意味用法を説明することができる。また、デとモのそれぞれの働きと、その他の特徴を考え併せることによって、デモの意味用法を分類することも可能になることから、デモをデとモの働きから考えることには有用性があると言える。

さらに今回は触れなかったが、モとの関係を中心に考えればテモもデモと同様にテとモとの関係で説明することが可能であり、テモとデモの関係も説明することが可能になるだろう。それについては今後の課題としたい。

〔参考文献〕

- 衣畑智秀 (2005) 「日本語の「逆接」の接続助詞について—情報の質と処理単位を軸に一」『日本語科学』17 国立国語研究所
- 奥津敬一郎 (1965) 「「ダ」による述部代用化—展成文法への試み—」『日本語教育』6号 日本語教育学会
- 奥津敬一郎 (1983) 『「ボクハウナギダ」の文法：ダとノ』くろしお出版
- 小野米一・李志華 (1988) 「係助詞「でも」と「だって」の用法について」『北海道教育大学紀要. 第一部. A, 人文科学編』39 北海道教育大学
- 久保篤子 (2008) 「助詞モについて」千葉大学文学部日本文化学科卒業論文 未公刊
- 久保篤子 (2010) 「助詞モの意味・機能から見た「不定詞+モ」「テモ」「デモ」の研究」千葉大学大学院人文社会科学研究科修士論文 未公刊
- 小泉 保 (1987) 「譲歩文について」『言語研究』第91号 日本言語学会
- 此島正年 (1977) 「いわゆる逆接の「も」」『国語研究』國学院大學国語研究会
- 坂原 茂 (1993) 「条件文の語用論」『日本語の条件表現』くろしお出版
- 定延利之 (1995) 「心的プロセスからみた取りたて詞モ・デモ」『日本語の主題と取立て』くろしお出版
- 澤田美恵子 (2007) 『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版
- 田川拓海 (2005) 「テ形と共起するとりたて詞について」『言語学論叢』第24号 筑波大学一般・応用言語学研究室
- 田中 寛 (1989) 「逆接の条件文くてもをめぐって」『日本語教育』67 日本語教育学会
- 内丸裕佳子 (2006) 「動詞のテ形を伴う節の統語構造について—付加構造と等位構造との対立を中心に—」『日本語の研究』第2巻1号 国語学会
- 仁田義雄 (1987) 「条件づけとその周辺」『日本語学』第6巻9号 明治書院
- 沼田善子 (1986) 「副詞句のとりたて—「と」「ば」「たら」「なら」と「も」—」『都大論究』23号 東京都立大学国語国文学会
- 沼田善子 (2007) 「「でも」か「で」と「も」か—「だ+とりたて詞」の諸相—」『文藝言

語研究 言語篇』52 筑波大学文芸・言語学系

沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』 ひつじ書房

野田尚史 (1994) 「仮定条件のとりたて—「～ても」「～ては」「～だけで」などの体系—」
『日本語学』第13巻第9号 明治書院

藤井聖子 (2002) 「所謂「逆条件」のカテゴリー化をめぐる—日本語と英語の分析から—」
『シリーズ言語科学4 対照言語学』東京大学出版会

〔用例出典〕

○CD—ROM版新潮の100冊 (1995 新潮社)

女社長に乾杯 (赤川次郎)

新橋烏森口青春篇 (椎名誠)

○文庫

辻仁成 (2009) 『マダムと奥様』 光文社

森博嗣 (2009) 『少し変わった子あります』 文藝春秋

米澤穂信 (2006) 『夏季限定トロピカルパフェ事件』 東京創元社

○シナリオ

及川章太郎 「せかいのおわり」シナリオ作家協会年鑑代表シナリオ集編纂委員会編『年鑑代表シナリオ集 '05』シナリオ作家協会 2006年

○雑誌

『週刊女性』3月17日号・8月25日号 2009年 主婦と生活社

『F1速報』マレーシアグランプリ号 2009年 三栄書房

【注】

- (1) 久保篤子 (2010・千葉大学大学院修士論文・未公開) では、モの原義を「モの上接要素が背後に集合を持つ」と考え、以下の4分類7種のモを考える。
①上接要素が集合の一要素であることを示す (基本のモ／意外のモ) ②上接要素が集合の代表であることを示す (事態の個性回避のモ／確定回避のモ) ③上接要素が内部集合を有することを示す (最高値のモ) ④空欄 (X) に当てはまり得るすべての要素が空欄に適用できることを示す (汎称のモ／当たり前のモ)
- (2) 定延は助詞のモを基本のモを中心に「知識のまとめ上げ」と「事態実現可能性の推し量り」の2つの方向に二分し、「知識のまとめ上げ」の方面は一般的抽象的知識の抽象度によって、抽象度の低いものから「色々のモ」「通念のモ」「当たり前のモ」の3つに、「事態実現可能性の推し量り」の方向においては「意外のモ」と「確定回避のモ」の2つに分けている。
- (3) 沼田は基本のモ・意外のモ・和らげのものの3分類で助詞の「も」を考えている。

- (4) 以下のようなデモ文で、②～④はもとの文に助詞モを加えたものであり本稿では扱わない。

①動詞の活用

(1) その本についての評判は聞いているし、実際自分で読んでもいる。(作例)

②形容詞の活用+モ

(2) どうせ私なんか、きれいでもないし、りこうでもないわよ。(沼田2007)

③格助詞+モ

(3) ということは、おいしいフルーツがあれば家庭でもこれは作れてしまうんじゃないだろうか。(夏季限定)

④名詞述語のコピュラ+モ

(4) 「だからアレはそういうチューじゃなく、平和主義者としてのチュー」「(笑ってしまい) なんだそりゃ」「博愛主義者としてのチューでもある」(せかいの)

- (5) 後件が成立する前件の集合の中にモで取り上げる要素が加わったことを表すのが基本のモである。

例) 佐藤も来る。は「Xも来る。」のXの要素に「佐藤」が加わったことを表す。

- (6) 本稿では逆接とは「前件Pと共存しやすい、または積極的に共存するだろうと期待される後件Qの存在が意識されるにも関わらず、Pとは共存しにくいと思われる後件Q'がPと共存すること。」と定義する。

「馬鹿でもできる」のような用例では「馬鹿だ」という前件に対して「できない」という後件Qが期待されるが、その期待に反して「できる」という後件Q'と共存することによって逆接となる。

- (7) 基本のモと同様、モで取り上げる要素が集合に加わったことを示すが、この集合に加わった要素が、集合に加わりにくいと思われる要素のため、意外性が出る。「さすがの久美子もあきらめた。」の用例では、あきらめた要素に久美子加わったことを表すが、このとき、久美子は集合に加わりにくい(あきらめにくい)要素である。
- (8) 汎称のモにはモのスコープ(焦点)になるものの個別性を回避し、当てはまり得るものすべてのものを空欄(X)に適用する働きがある。「誰も来ない」では「Xも来ない」のXにAさんもBさんもCさんも……nさんも、あてはまりうる要素がすべて当てはまることを表す。
- (9) 沼田(1986)では「選択的例示」の「でも」は「も」を削除することはできないとして一語のとりたて詞と考える。Ex) たまには彼女と映画でも見に行こう。

(くぼ・あつこ タイ早稲田日本語学校専任講師)